

環びわ湖

大学地域交流フェスタ 2021



環びわ湖大学・地域コンソーシアム

活動報告会プログラム

12月5日(日)

10:00～12:30<予定>

会場:オンライン(ZOOM)で実施

主 催：一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム
〒520-0056 大津市末広町 1-1 日本生命大津ビル 4階
TEL：077-526-8850 FAX：077-526-8851
e-mail：info@kanbiwa.jp <http://www.kanbiwa.jp/>

ごあいさつ

みなさま、お元気でお過ごしでしょうか。環びわ湖大学・地域コンソーシアム「大学地域交流フェスタ 2021」を今年もオンラインで開催いたします。

この大学地域交流フェスタは、環びわ湖大学・地域コンソーシアムが、大学と地域との交流を深めることを目的として、コンソーシアムの「大学地域連携課題解決支援事業」と「学生支援事業」の中間活動報告を行い、この間の成果をみなさまに発表し、同時に地域の皆様と大学生との交流を図って、今後の大学と地域の発展につなげようとするものです。

今年度は、コロナ禍が続きながらも、大学地域連携課題解決事業は継続 7 件、新規 12 件の計 19 件に上り、滋賀県及び 6 つの市に対して 8 つの大学がそれぞれに連携協力して活発な活動を行っています。

残念ながら今回も、地域の皆様と大学の教員や学生との、また教員・学生同士の、直接の交流の機会を持つことができませんが、本日の発表を通じて各大学の教員や学生たちが地域の中に入り込んで様々な活動をしてきたことを知っていただくことにより、さらに大学と地域の連携が広がっていくことを期待しています。このフェスタが、昨年度の第 3 ステージ宣言「持続可能な開発目標に向けて」が目指す、「だれ一人取り残さない」豊かで幸せな地域と世界の実現に進んでいく意義深い催しとなることを願います。

最後に、新型コロナウイルス感染症は、夏から続いた第 5 波も急速に収束し、大学も地域も徐々に元通りの生活に戻りつつあります。しかし、完全収束までは、気を緩めることなく、3 密を避けるなど、感染拡大の防止と新しい生活の工夫をこらしていきましょう。

2021（令和3）年12月5日

一般社団法人環びわ湖大学・地域コンソーシアム
理事長 位 田 隆 一（滋賀大学学長）


■プログラム（概要）

1. 開会（10:00）
2. 環びわ湖大学・地域コンソーシアム 地域課題解決支援事業活動
中間報告会（10:00～12:30）
3. 閉会（12:30<予定>）

環びわ湖大学・地域コンソーシアム
大学地域連携課題解決支援事業、学生支援事業 活動報告

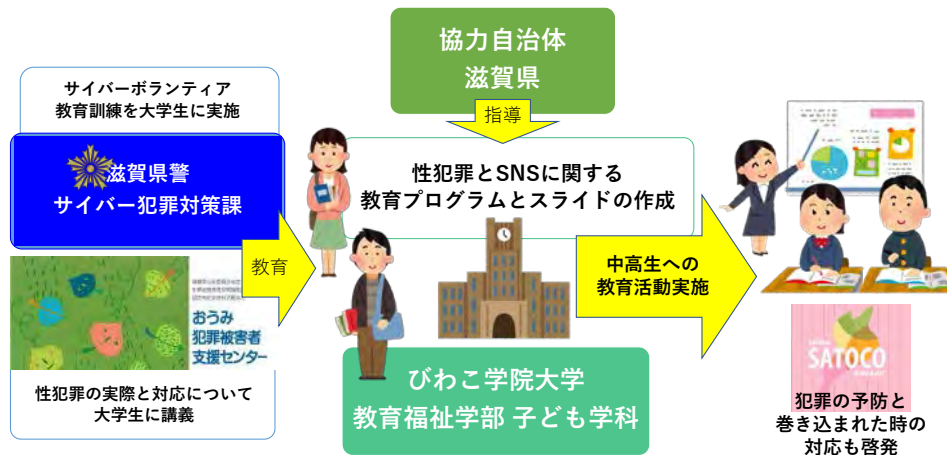
1. 滋賀県×びわこ学院大学	4
大学生による子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動 ～S（スマート）にN（ネット）を使えばS（スマイル）に～	
2. 大津市×びわこ学院大学	6
就学前児童から科学の面白さを体感させる実験・ものづくりプロジェクト ー大津市科学館「わくわくサイエンス」事業を活用してー	
3. 大津市×滋賀県立大学	8
「お弁当ラリー」を通じた「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト	
4. 東近江市×龍谷大学	10
地域活性化につながるモノ・コトの探求と吸引力の創出 （「市」を通じた地域の活性化ー中山間の「位置」エネルギーを創出ー）	
5. 甲賀市×立命館大学	12
朝宮茶の魅力を創造する旅 甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）から発信する「すべての人に健康と福祉を（SDGs）」	
6. 甲賀市×立命館大学	14
国史跡紫香楽宮跡を活かした地域振興について	
7. 草津市×立命館大学	16
芦浦観音寺納豆再現プロジェクト	
8. 長浜市×滋賀大学	18
「サステイナビリティ・マップの創造」 一言で言えない風景×都市住民をひきつける空き家×地域コミュニティカ	
9. 彦根市×聖泉大学	20
十人十色プロジェクト（性の多様性を知ってもらおう！）	
10. 彦根市×滋賀県立大学	22
Explore Hikone!!～地域マップの多言語化を通して多文化共生をすすめよう～	
11. 滋賀県×龍谷大学	24
地域の笑顔を SNS で届けるーシニアボランティアの ICT ツール習得支援ー	
12. 東近江市×びわこ学院大学	26
東近江市中心市街地活性化に関する実証的研究	
13. 東近江市×びわこ学院大学	28
子どもの手がた足がたを用いたオリジナルグッズづくりを通して、 楽しもう、知ろう、広めようオレンジリボン運動×SDGs	
14. 東近江市×びわこ学院大学	30
ポストコロナにおける大学生によるカナヅチ児童を対象とした水泳教室 ～運動介入による小大連携への模索～	
15. 東近江市×びわこリハビリテーション専門職大学	32
いきいき生活プロジェクト ー頭と体のリフレッシュー	
16. 長浜市×長浜バイオ大学	34
びわ湖の森の生き物「トチノキ」の電頭画像を発信する	
17. 長浜市×長浜バイオ大学	36
河川再生プロジェクトと科学に対する学びの場の提供	
18. 草津市×龍谷大学	38
AR コンテンツを用いた草津の魅力発信	
19. 彦根市×滋賀大学	40
琵琶湖よ、自然に還れ“未来への遺産”	
20. 学生支援事業部会報告「活動報告・動画発表」	42

No. 1

プロジェクト名（活動テーマ）：	大学生による子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動 ～S（スマート）にN（ネット）を使えばS（スマイル）に～
SDGs 目標	
提案者	：びわこ学院大学 BGU 若鮎隊 教員 内藤 紀代子、学生 橋山 ゆず波
自治体担当者	：滋賀県総合企画部 県民活動生活課 消費生活・安全なまちづくり係 尾上 祐子
連携大学担当者	：びわこ学院大学 教育福祉学部 子ども学科 内藤 紀代子 総合企画部地域連携研究支援課 今若 彦二
発表者	：上田 登喜子、徳田 恵（学生BGU 若鮎隊）

1. 取組体制

びわこ学院大学が滋賀県警察サイバー犯罪対策課、（公社）おうみ犯罪被害者支援センター、滋賀県総合企画部県民活動生活課の協力のもと、子どもたちへの性犯罪予防の SNS の使い方啓発活動を行なう（下記図）。



2. 背景・目的

滋賀県は、スマートフォンやパソコンの 1,000 世帯あたりの所有数量が全国第 1 位である。それに伴って、子どもや女性が性犯罪に巻き込まれる被害や声かけなどの前兆事案が増加している（R1 年度の 789 件：参考滋賀県警 HP）。SNS と関係した性犯罪が多く発生しているため、ピアサポート効果を期待して大学生が安全な SNS の使い方を小中高生に講演やワークショップを行ない性犯罪予防の啓発を行なう。

3. 活動内容

今年度、活動に際して滋賀県警察サイバー犯罪対策課が養成している「滋賀県警察サイバーボランティア」の教育訓練を 5 名の大学生が受講した。さらに、「おうみ犯罪被害者支援センター」の副理事長であり支援局長の松村裕美氏から性犯罪の現状と対策の講話を 9 名

の大学生が同センターで受けた。こうして、実態を理解した上で SNS を介しての性犯罪やトラブルに巻き込まれないための教育講演のスライドのブラッシュアップと講演に向けての準備を行なった。講演に際して、若者の SNS トラブルの実態を把握するため許可の得られた高等学校の生徒 133 名に SNS を使用して「怖い思いをしたもしくは嫌な思いをしたことがあるか?」という質問に 13 名 (9.7%) が「はい」と答えた。内容は「卑猥な動画」、「会おうと言われた」、「勝手に写真を使われた」、「ウイルス感染」、「詐欺に会いかけた」、「暴言」等であった。これらを考慮した講演の内容とした。今年度は、大学生による講演活動を滋賀県下の 7 つの教育施設で実施・予定した。

4. 成果と課題、今後の取組

①啓発に向けての大学生の育成成果

本事業の 2 年間での SNS の使い方啓発活動に向けての大学生の育成成果

内容	R2 年度	R3 年度	合計人数
滋賀県警察サイバーボランティア教育訓練	3 名	5 名	8 名
大学教員の養成講座受講	8 名	3 名	11 名
おうみ犯罪被害者支援センターでの講話受講	—	9 名	9 名

総合計 28 名

②R3 年度の啓発活動の実践実績

実施日	教育機関場所	対象児童・生徒数	実施大学生数
R3 年 7 月 19 日	東近江市内高等学校	170 名	3 名
R3 年 10 月 20 日	蒲生郡内高等学校	147 名	2 名
R3 年 10 月 27 日	近江八幡市内中学校	35 名	4 名
R3 年 11 月 12 日	東近江市内高等学校	170 名	2 名
R3 年 11 月 18 日	彦根市内高等学校	320 名	1 名
R3 年 12 月 6 日予定	東近江市内中学校	170 名	2 名
R3 年 12 月 15 日予定	東近江市内高等学校	80 名	4 名
R4 年 1 月 25 日予定	近江八幡市内高等学校	192 名	4 名


本事業の 2 年間での SNS の使い方啓発活動のまとめ

R2 年度	R3 年度	対象生徒数	実施大学生数
11 の教育施設 1496 名の生徒	8 つの教育施設 1284 名の生徒	2780 名	35 名

③今後の取り組み

2 年で多くの教育機関の生徒様を対象に、大学生による子どもたちへの性犯罪予防 SNS の使い方啓発活動～S (スマート) に N (ネット) を使えば S (スマイル) に～を展開してきた。しかし、子どもたちが SNS を介して性犯罪に巻き込まれる割合は増加の一途にある。今後は対象年齢を下げた小学生や中学生をメインに実施していきたい。

今回、コロナ禍でイベントとして本事業を展開できなかったが、大学生による保護者向けの講座も今後実施したいと考える。

プロジェクト名（活動テーマ）： 就学前児童から科学の面白さを体感させる実験・ものづくりプロジェクト -大津市科学館「わくわくサイエンス」事業を活用して-	
SDGs 目標	
提案者	: 箱家 勝規（びわこ学院大学 教育福祉学部 教授）
自治体担当者	: 武富 大空（大津市科学館 指導主事）
連携大学担当者	: 今若 彦二（びわこ学院大学 地域連携支援課）
発表者	: 田淵 雅也（びわこ学院大学 4 回生）

1. 取組体制

本大学の箱家研究室のゼミ生（3 回生 6 名、4 回生 4 名）で「サイエンスチーム」を立ち上げ、ゼミ活動の一環として実践をしている。学生は、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生たちである。このチームが大津市科学館の「わくわくサイエンス」の事業の講師として就学前児童や小学生を対象に「科学実験」や「ものづくり」を行っている。これらの内容は、小中学校の理科教育とのつながりを意識させながら取り組んでいるが、「タイトルの決定」「問いかけ」「演示方法」「実験方法」「ものづくりの手順」などを綿密に話し合いながら、児童の興味関心が高まるような活動になるように内容や手順を模索し、安全性を重視して進めてきた。

2. 背景・目的

就学前児童や小学生が、身近な素材による「科学実験」や「ものづくり」に関わる機会は少ない。小学校 3 年生から理科の授業では「ものづくり」が必須であるが、実際の授業では、既製のもので作らせているのがほとんどである。安全面や準備の時間を考慮すれば、そうせざるを得ない実状がある。

そこで、就学前児童や小学生およびその保護者を対象に身近な素材を使い、興味が湧くような提示をし、科学の面白さを感じさせ、夢中で取り組める時間にしたいと考えている。これまで 4 年間の取り組みを続けており、今年度は緊急事態宣言を除く期間に月 1 回を実施してきた。

3. 活動内容

(1) コロナの影響で参加者は大幅に縮小されたが、以下の通り実施をすることができた。

	期 日	タイトル名	参加人数
1	4 月 3 日（土）	みんな 北向け北	子ども 8 人・大人 8 人
2	5 月 1 日（土）	水の中で大変身	子ども 8 人・大人 8 人
3	6 月 5 日（土）	動く 4 コマまんが	子ども 11 人・大人 7 人
4	7 月 3 日（土）	はねる うかぶ かさなる	子ども 9 人・大人 10 人
5	7 月 31 日（土）	-19.6℃のひみつ	子ども大人 98 人
6	8 月 21 日（土）	まわれ アクアボール	子ども 12 人・大人 11 人
7	10 月 2 日（土）	ドングリモビール	子ども 6 人・大人 7 人
8	10 月 23 日（土）	なぞのひこう物体 K T	子ども 12 人・大人 11 人
9	11 月 20 日（土）	なぞのひこう物体 T	子ども 12 人・大人 12 人

(2) 活動内容の一部を紹介する。

①タイトル名「みんな 北向け北」

鉄が磁石に付くことは、小学3年の理科で学習する。各家庭をはじめ幼稚園や保育園での経験もあり、知っているという子どもたちも多い。ところが、「棒磁石が北を指すこと」「磁石で擦った鉄の道具は北を指す」ことの経験はあまりない。方角を知らない子どもたちに「北」を教えるということではなく、磁石を鉄に擦ることで新しく磁石ができることに気づかせたいと考えたからである。

ハサミ、スプーンなど磁石にくっつく鉄製のものは、磁石を一定方向に擦ると磁石に変わる。水の入った水槽の上に発泡スチロールを浮かばせ、その上に磁石で擦ったハサミをのせると、すべてが北を指すのである。ハサミやスプーン、さらにはお玉など鉄製のものがすべて同じ方向に向くことから、子どもや保護者は不思議な世界を見せられている様な表情で参加をしていた。



②タイトル名「水の中で大変身」

透明のビニール袋に入ったジャムおじさんの顔が水の入った紙コップの中に入れるとアンパンマンに変身してしまうという実験である。

空気から水に光が進むときに屈折するが、角度によっては全反射をしてしまい袋の中のものが見えないという現象が生じるからで、身近な素材を使った単純な光の実験である。



4. 成果と課題、今後の取組

・多くの子どもたちや保護者に興味を持って参加をしてほしいという思いから、タイトル名を決めるときには、かなり熟慮している。見たときに、「何だろう」「見てみたい」という気持ちにして参加を促す様なタイトルをつけることに心がけた。

・20分という限られた時間内の活動であるため、「興味を持つ」→「試す」→「考える」→「試す」という一連の活動を保証した時間配分になっている。どこまでを準備し、何を児童に取り組ませるのかは学生同士でよく話し合っていて決めている。

・「わくわくサイエンス」は大津市科学館に来られた一般のお客様の親子を対象としているため、年齢、参加人数、性別などは当日の開演直前までわからない。したがって、就学前児童から大人までが興味を持ち、やってみたいという気持ちにさせるような内容であることを重視している。保護者に「えっ、どうして?」「やってみたい」と思わせるような活動内容にすることが必要である。保護者に興味を持ってもらうことで、家に帰っても一緒に楽しむ時間が継続できるよさがあるからである。

・学生にとって親子を相手に演示したり指示や説明をしたりできる機会が得られ、さらには子どもと接する機会が増えて、大きな刺激となり学びの場が広がったことは大きな収穫である。



No. 3

プロジェクト名（活動テーマ）： 「お弁当ラリー」を通じた「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト	
SDGs 目標	
提案者	：滋賀県立大学環境科学部 3 年生・平田裕
自治体担当者	：大津市役所・商工労働政策課主事・望月隼
連携大学担当者	：滋賀県立大学地域共生センター 谷口嘉之・上田洋平
発表者	：滋賀県立大学環境科学部 下口晴輝

1. 取組体制

- ①滋賀県立大学「大津ナカマチ SDGs 商店街」プロジェクト：まち歩きコンテンツ企画・実施・開発
- ②滋賀県立大学：大津市との連携協定に基づき副専攻地域共育プログラムや環びわコンソ科目におけるフィールドワーク先として位置付ける等して学生・教員のかかわり・指導を促進・担保。
- ③大津市役所：フィールドワークの受け入れ・調整、広報等
- ④滋賀トヨペット Boss 百町物語：ナカマチ商店街を構成する丸屋町・菱屋町・長等各商店街と大学との窓口として各種調整、学生チームへの助言

2. 背景・目的

大津市ナカマチ商店街は、生活様式の変化、周辺商業地との競合、空き店舗の増加等により活力が減衰する状況にあるが、歴史や町並、各店舗に着目すると他にはない魅力があることが分かる。そこで、商店街の資源をつなぐコンテンツを開発することによりまちの魅力を発信し、近隣に居住する子育て世代や観光客の取込みを図る。

3. 活動内容

下記の活動を実施する計画であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大による緊急事態宣言等の影響により、11 月末までの時点では当初予定の活動を行うことができていない。



- 1)参加者が商店街を巡り、食材等を買集めながら、店主との対話を通じて地域や商品の魅力に触れる。
 - 2)食材を折箱に詰め、商店街の魅力が凝縮したオリジナル弁当を作る。
 - 3)写真を SNS などで発信する。
- 以上のイベントを「お弁当ラリー」と名付け、学生チームが商店街関係者と連携して数回にわたり企画・運営・実施する。実施結果をもとに観光・まち歩きあるいは地域学習コンテンツとして開発・定着させる。

4. 成果と課題、今後の取組

お弁当ラリーについては上記の通り、開催が足踏み状態であるが、その後、感染状況が一時的に減少傾向にあることから、12月後半をめぐり、関係者を中心とした少人数による試験的・模範的開催をするために準備中である。この2年間はコロナ禍と言われる状況の中で、活動の足踏みを強いられてきたが、この経験を生かして、いわゆる「withコロナ」仕様の活動やイベントのあり方を考え、試行していきたい。

また、12月11日、12日、19日の予定で滋賀県立大学および県内各フィールドで開講される「地域デザイン A（環びわ湖大学・地域コンソーシアム単位互換科目「おうみ学生未来塾」）のフィールドワーク先の一つに大津ナカマチ商店街を含む中心市街地が含まれており、12日に予定されているフィールドワークの中で、お弁当ラリーの取組みについても紹介する予定。

また、前年度までの活動を踏まえて、ナカマチ商店街の空き店舗や放送設備を活用した拠点づくり等の事業についても検討しているところである。

プロジェクト名（活動テーマ）：	
地域活性化につながるモノ・コトの探求と吸引力の創出 （「市」を通じた地域の活性化—中山間の「位置」エネルギーを創出—）	
SDGs 目標	  
提案者	： 龍谷大学農学部 淡路和則
自治体担当者	： 東近江市農林水産部 中西安治
連携大学担当者	： 龍谷大学農学部 淡路和則
発表者	： 龍谷大学農学部 寺澤香穂

1. 取組体制

龍谷大学農学部の淡路ゼミが中心となって、グリーンラボラトリー、地元自治会が共同して、東近江市百済寺地区での資源の掘り起こしを行う。人の流れや訪問についての意識やニーズを把握する調査については、愛の田園振興公社、百済寺の協力のもと、淡路ゼミが実施する。

2. 背景・目的

東近江市の百済寺地域は、湖東三山のひとつ百済寺を中心として拓けた地域であるが、山間にあり過疎化が深刻化している。紅葉の名所として知られ、シーズンには多くの人出があるものの、その賑わいが地域の活性化に結び付いていないのは難しい。また、百済寺自体の来場者数が減少しており、檀家をもたない寺として収入の減少は寺の維持につながる大きな問題となっている。

他方、同じ旧愛東町にある道の駅「あいとうマーガレットステーション」には多くの来客があり、買上客数は年間 70 万人を超える。

本プロジェクトでは、百済寺への来訪者を増大させるために、まず「あいとうマーガレットステーション」から百済寺への人流を増やすことを検討する。

3. 活動内容

当初は、百済寺およびその周辺でのイベントに参加あるいはイベントを開催する予定であったが、新型コロナの感染拡大のため、当地域での催しものがすべて中止となり、現地での活動も制約を受けることとなった。

そこで、マーガレットステーションの来場者を対象に百済寺の認知度や関心事項を把握して、地域への往来ニーズを探り、さらに百済寺訪問者が感じる魅力を捉えることによって、百済寺地区の吸引力を明らかにすることにした。

具体的活動内容は、下記の通りである。

1) 地域についての学習・意見交換

百済寺地区で地域おこしの協議会のメンバーから、百済寺地域の自然や歴史について話を聞き、現在抱えている問題について意見交換を行い、来訪者を増大させ、地域の経済に好影響を与えるためのアイデアを出し合った。

2) 道の駅「あいとうマーガレットステーション」におけるアンケート調査

来場者が多い「あいとうマーガレットステーション」で、アンケート調査を実施し、集客範囲、来場目的とともに百済寺の認知度、訪問経験、訪問意向等について聞き取りを行った。

アンケートは、平日と休日とで客層が異なることが想定されたため、平日と休日の2回実施することにした。

3) 百済寺におけるアンケート調査

来場者数が多くなる紅葉のシーズンに百済寺の訪問者を対象としてアンケート調査を行い、集客範囲、訪問経験、立ち寄り箇所、リピート意向等について聞き取りを行った。

アンケート調査は、来場者が多い休日に実施し、補足的に平日も実施した。

4) 百済寺樽の販売サポート

かつて百済寺でつくられていた僧坊酒を復活させる百済寺樽プロジェクトに研究室で参加しており、紅葉シーズンに境内での販売のサポートを行った。

販売の傍ら、百済寺の印象等を来店者にヒアリングした。



マーガレットステーションでの調査



百済寺での調査

4. 成果と課題、今後の取組




新型コロナ感染拡大により、現地との行き来が制約されていたが、行動制限が緩和されたのを契機に現地を訪問し、情報提供を受け、意見交換することによって、地域への理解を深めることができた。

アンケートについては、集計・分析の途中であるが、①百済寺の認知度は高いものの実際の訪問には結びついていない、②百済寺訪問のリピーターが少ない、③マーガレットステーションとの間の人流は多いとはいえない、④百済寺の四季の花についての関心が高い、⑤百済寺の吸引ファクターに男女間の違いがみられる、などがポイントとして浮かび上がっている。

今後は、アンケート調査の分析をさらに進め、その結果を百済寺地区で報告するとともに、百済寺地区住民との意見交換をしながら地域の吸引力を高め、人流を増大させるためのモノ・コトを構想する。



百済寺境内での百済寺樽販売

プロジェクト名（活動テーマ）： 朝宮茶の魅力を創造する旅 甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）から発信する「すべての人に健康と福祉を（SDGs）」	
SDGs 目標	  
提案者	鳥巢 祐史、西川 幸祐（立命館大学スポーツ健康科学部）
自治体担当者	久保 重徳（甲賀市農業振興課）
連携大学担当者	岡本 直輝（立命館大学スポーツ健康科学部）
発表者	鳥巢 祐史（立命館大学スポーツ健康科学部）

1. 取組体制

- 立命館大学スポーツ健康科学部に甲賀市地域連携チームを設けた。
- メンバーは、主にスポーツ教育<コーチング>を学ぶ学生（学部生&大学院生）と教職員の9名で構成している。
- 立命館大学スポーツ健康科学部10周年企画として進め、学部内で甲賀市への理解を深めた。今後、甲賀市民の健康増進について連携できる機会にしたいと考えている（現在、健康教室などの支援を行っている）。
- 大学と連携するサポート窓口は、甲賀市産業経済部農業振興課とする。
- その他：事業においては、本プログラムと甲賀市が年間スケジュールを調整し進めている。特に信楽・土山地域の農家や農業団体へのコーディネートは、甲賀市に行っている。

2. 背景・目的

甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）の香りは、1煎目ばかりでなく2煎目、3煎目でも楽しむことができると言われていた。これは葉の持つエネルギーが他の銘柄茶よりも高いことが理由である。しかし、多くの若者は、日本茶をゆっくりと味わう機会を持っていない。さらに、お茶を淹れた後の出がらしをゴミとして廃棄することがほとんどであり、再利用するといった発想を持っていない。この点に着目し、SDGsに関連させ「お茶の出がらしの利用」といった取り組みを昨年度から実施している。またコロナ禍の中で、茶葉に含まれるカテキン類がコロナ無害化の効果があるといったことも報道されていることから、お茶がさらに注目されるのではないかと考える。

そこで本プログラムは、甲賀の茶（朝宮茶、土山茶）が有するエネルギーを飲み味わうばかりでなく、出がらしの再利用を意識し、スポーツ選手のコンディショニングづくりに役立つ利用方法について検討してきた。出がらしはスポーツ選手の緊張を和らげるといった調査結果を得たことから、今年度はスポーツ選手へ出がらしを試食させた場合の「味わい」とスポーツ現場での利用法について調査することを目的とした。

3. 活動内容

以下の5項目について調査を行った。4)及び5)については昨年からの継続調査である。研究対象者は、全て体育会をはじめ何らかのスポーツ活動に関わっている学生らである。調査内容は「スポーツ選手を取り巻くスポーツ環境」に焦点をあて、調査を行った。

1) スポーツ選手が飲む飲料水の調査

スポーツ健康科学部で学ぶ124名の学生を対象に、練習以外で飲む飲料水について調査を行った。

2) 甲賀茶の認知度の調査

上記示した学生 106 名を対象に（滋賀県出身者を除く）、甲賀茶の認知度について調査を行った。また実際に甲賀茶を試飲した場合の「味わい」について調査した（ティーパック用 「近江の茶」をはじめ甲賀農協販売品を用いて）。

3) 出がらしの試食調査

体育会学生 36 名を対象に、朝宮茶（緑茶）の 1 煎目後の出がらしを試食させ、試食前と試食後の「味わい」「印象」について調査を行った。

4) 出がらしを用いた「茶香」の調査

体育会学生 22 名を対象に、朝宮茶（緑茶、ほうじ茶）の 1 煎目後の出がらしを用いて、「茶香の味わい」といった企画を催し、選手のリラックス効果について調査を行った（前年度の継続）。

5) 出がらしを用いたレシピの調査

出がらしを用いた 7 種のレシピ（以下に示す）の感想（試食）と実践意欲について調査を行った。①出がらしを入れた卵焼き ②出がらしを入れた卵かけごはん ③出がらしクッキー ④出がらしを煎り胡麻で混ぜ合わせたふりかけ ⑤出がらし入りチャーハン ⑥出がらしを入れたおにぎり ⑦出がらしみそ汁

4. 成果と課題、今後の取組

甲賀茶は、滋賀県で学ぶ学生間において認知度が低く、スポーツ選手が飲む飲料水として利用されていなかった。スポーツ活動以外の生活面において、「茶」が飲料水として飲まれている頻度が高いことから、甲賀市がスポーツ栄養士と連携し「スポーツ選手を支える茶」を考案することによって認知度を高められるのではないかと考える。

出がらしの試食調査についてみると、図に示すように試食による「うまみ」「さっぱり感」において、試食後の感想は試食前と比べ有意に高い値を示した（ $p < 0.05$ ）。出がらしを食べる機会を増やす取り組みが必要であると考え。特に、「さっぱり感」については、試合前の緊張、練習後の休息（自宅等）に効果があり、茶の利用を生活面に取り入れたいといった意見等が多く出された。また下宿生活を行って

いる学生らは、出がらしを入れた卵焼きに対し好印象を示し、簡単料理として応用したいといった意見が出された。この事例は、スポーツ選手の食に関する SDGs の取り組みとして普及できるものと考え

る。今後、「3. 活動内容」で示した 3)

4) についてさらに調査を進めていく。緑茶の出がらしには、ビタミン C やカテキンが多く含まれている。茶に含まれる脂溶性にも β -カロテンが含まれ、視力の回復や肌作りに作用する。さらに血行を改善するビタミン E も含まれることから、

スポーツ選手にとって出がらしは、効果的なサプリメントとして利用できるものと考え

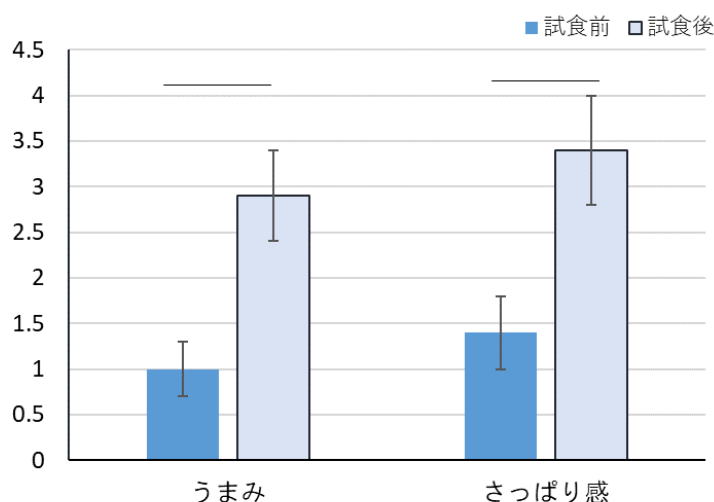


図 味わい調査（5段階評価）試食前・後に有意差あり
($p < 0.05$)

プロジェクト名（活動テーマ）：	
国史跡紫香楽宮跡を活かした地域振興について	
SDGs 目標	 
提案者	：紫香楽宮跡整備活用実行委員会 実行委員長 水野藤志夫
自治体担当者	：甲賀市 歴史文化財課 主査 渡部圭一郎
連携大学担当者	：立命館大学 経済学部 黒川 清登
発表者	：

1. 取組体制

会長：雲井自治振興会長

実行委員長：水野藤志夫 紫香楽宮跡整備活用実行委員会 委員長

事務局：金谷英三 新事業企画実行委員会 委員長、顧問：里見淳市議会議員

連携大学：立命館大学経済学部 黒川ゼミ「紫香楽宮まちづくりチーム」 大学は、地域資源の発掘、活用の可能性を若い視点で必要な調査などを担当する。

甲賀市歴史文化財課、宮町営農組合、J Aこうか

2. 背景・目的

甲賀市信楽地区には、国史跡紫香楽宮跡、日本遺産「忍者」の構成文化財である飯道神社をはじめとした貴重な地域資源が集中する地域であるにも関わらず、これらが必ずしも活かされず地域振興に結び付いていない。

立命館大学では、2018年春から本格的に調査協力を開始し、紫香楽の宮跡の活用方法を模索してきた。雲井自治振興会との史跡活用ワークショップを重ね、2019年春には、紫香楽宮跡の活用に地域住民は、積極的であることが明らかになった。

2020年には、私有地となっている史跡の一部を、甲賀市が買い取り、史跡公園を5年後を目途に運用する方針が定まり、本委員会の設置が決まった。同地区には、これまでも都あかり、天平ふれあいマーケットなど紫香楽宮跡に関連する多彩な季節のイベントがあり、これらの既存のイベントも含め、まちづくりに紫香楽宮跡を積極的に活かすことを目的としている。

2021年度では、史跡公園への来訪者を出迎えるにあたり、紫香楽のイメージをビジュアルに定着させるため、ラベンダー植栽による環境整備、および、史跡を案内するホームページ、関連する案内のための動画の作成を行うことを目的とした。

3. 活動内容

活動は、コロナ禍にもかかわらず、Zoomを活用するなど、「定期会合」、「ラベンダー植栽」、「植栽に伴う他の事例調査」、および、「ホームページ作成のための取材等」を行っている。

（1）定期会合

2021年度は、毎月1回のペースで、上記の事業の進捗を関係機関で確認しながら、事業を進めてきた。主な議題は、植栽にあたり準備すべきこと、ラベンダーを如何に地域活性化に活用するか、関連商品の開発、生育への地域住民の協力体制を如何に構築するか、事例研究などである。

2021年4月28日 第6回会議 雲井活性化センター 学生はZoom参加

2021年5月25日 第7回会議 雲井活性化センター 学生はZoom参加

2021年6月29日 第8回会議 雲井活性化センター 学生はZoom参加

2021年7月27日 第9回会議 雲井活性化センター 学生はZoom参加

2021年8月31日 第10回会議 雲井活性化センター 学生はZoom参加

（長濱鳥瞰図の甲賀市への応用も議論）

- 2021年10月8日 第11回会議 雲井活性化センター 学生は対面と Zoom 参加
 2021年11月19日 第12回会議 雲井活性化センター 学生は Zoom 参加
 2021年12月23日 第13回会議(予定) 雲井活性化センター

(2) ラベンダー植栽にかかる調査と植栽

植栽の対象を、紫香楽のイメージに合う事、および、植栽予定地で出没する野生の鹿の被害を免れ得る植物、という視点からラベンダーをさし木、種から育て、植栽する計画が実行された。

- 2021年5月22日 グリーンスポット・デン(滋賀県高島市)訪問、ヒアリング
 2021年6月1日 グリーンスポット・デン鶴野氏(専門家)より植栽の助言を得る
 2021年7月23日 育苗苗のポット上げ作業(生育に伴う植え替え) 学生も参加
 2021年8月10日 マーガレットステーション(滋賀県東近江市)訪問、ヒアリング
 2021年10月16日 ラベンダー多可(兵庫県多可町)訪問、ヒアリング(学生も参加)
 2021年10月17日 第1回ラベンダー植栽(学生も参加)
 2021年10月21日 第2回ラベンダー植栽(学生も参加)
 2021年10月29日 第3回ラベンダー植栽(学生も参加)

(3) ホームページのコンテンツ準備関連の活動

- 2021年11月12-13日 黒川ゼミ4回生のゼミ合宿(雲井周辺の調査)
 2021年11月13日 紫香楽の宮歴史ツアー「ナゾトキ7」(信楽の小学生に甲賀寺跡周辺での歴史クイズを大学生と伴に楽しんでもらう企画)の実施への協力
 2021年11月20-21日 黒川ゼミ3回生のゼミ合宿(雲井周辺の調査)

4. 成果と課題、今後の取組

(1) 定期会議

非常事態宣言解除後は、信楽の雲井活性化センターでの対面の実施を主とするも、より多くの学生が参加しやすいように Zoom も併用する。

(2) ラベンダー植栽とその関連調査

10月末までに、ポットで育てたラベンダーを植栽予定地に、約500株の植栽を完了した。今後の最大の課題は、氷点下にもなる信楽で無事に越冬ができるかの工夫を如何に施すか、新たな保守管理、霜対策、降雪対策などが必要になっている。また、ラベンダーを地域振興にあつかっているラベンダー多可(兵庫県)をモデルに、どのような商品開発(アロマスプレー、ドライフラワーなど)が本計画で導入可能かの調査を続けていく。

(3) ホームページのコンテンツ準備関連の活動

紫香楽の宮の史跡の価値は、一般の人には馴染みがなく、また、難しい説明では関心を引くことは難しい。特に、この紫香楽の宮の史跡は、建物などの遺跡が存在しないため、どのように説明を行うか、どのような動画が興味を引くか、ウォーキングマップや鳥瞰図(長濱の鳥瞰図の応用)も含めて検討を行う必要がある。

10月までは、非常事態宣言もあり、学生もほとんど現地調査を行えなかったが、10月以降は集中して植栽や調査を実施してきた。これまでの学生の調査では、周辺の忍者にも関連する飯道山なども含めたウォーキングツーリズムなどの検討も行っている。動画は3-5分程度の短いものを作成し、本プロジェクトチームで作成している、紫香楽の宮のホームページを通じ公開していく予定である。

(4) 学生の調査まとめ

2,3回生の学生には、それぞれ紫香楽の宮チームを結成し、これまでの調査結果を、3回生は、大学間対抗の WEST 論文大会(11月27-28日)で発表を行った。また、2回生は大学内のゼミナール大会で12月11日に発表を行う予定で準備を進めている。また、その成果は、2022年2月には、卒業研究・演習論文集として製本し、関係者に配布する予定である。

プロジェクト名（活動テーマ）：	
芦浦観音寺納豆再現プロジェクト	
SDGs 目標	  
提案者	立命館大学 食マネジメント学部 准教授 鎌谷かおる
自治体担当者	草津市環境経済部 商工観光労政課 課長 井上博道
連携大学担当者	立命館大学 総務部 BKC 地域連携課 笠倉 研
発表者	立命館大学 食マネジメント学部 学部生 三浦加帆 立命館大学 食マネジメント学部 准教授 鎌谷かおる

1. 取組体制

代表者 鎌谷かおる（立命館大学食マネジメント学部・准教授）

→全体総括／調査研究／事務

大学生 納豆文化勉強会

（食マネジメント学部鎌谷研究室学生 三浦加帆 立石綾 八木紗絵）

研究協力者 西川浄海（芦浦観音寺・住職）

研究協力者 高橋大樹（大津市歴史博物館・学芸員）

研究協力者 八杉 淳（草津宿街道交流館・館長）

2. 背景・目的

本課題は、草津市の芦浦観音寺でかつて製造されていた納豆を、①寺院と食、②近江国の農業生産の歴史、③嗜好品としての納豆製造の三つの観点から分析し、地域における食の在り方の歴史を総合的に解明しようとするものである。

分析結果を通じて、草津市の名産品としての納豆製造の実現化について模索することも視野に入れている。

3. 活動内容

本課題は、①芦浦観音寺納豆に関連する歴史資料の調査、②現草津市域の農業生産（特に大豆）の歴史解明、③近江国（滋賀県域）における発酵品としての納豆の位置付け、④観音寺納豆復元に向けての準備、の4つの取り組みを予定して2020年度に開始したが、コロナ禍のため、大半の活動が行えなかった。

今年度は、体制を維持しつつ、活動を開始したが、再びの緊急事態宣言や、長く続くコロナ禍の状況を鑑み、まずは大学内でおこなえる作業を中心に取り組みを進めている。

とりわけ、上記の②、③に関しては、文献やこれまでのインタビュー調査等のデータを用いることで作業が可能であるため、着々とデータを整えつつある。

また、今年度の活動では、年度末に「納豆ガイドブック」の原稿完成を目指しており、現在はその準備も進めつつある。








ただし、歴史資料に関する勉強会については、コロナ禍のため、実施していなかったが、秋以降、大学内における BCP レベルのダウンによって学外活動の規制が緩くなったことから、12月・1月を目標に実施したいと計画している。

残りの期間で、これまでの作業に加えて、勉強会での成果を踏まえつつ、「納豆ガイドブック」を完成させることを目標にしている。

4. 成果と課題、今後の取組

本課題では、地域にかつて存在した名産品について、歴史的な裏付けや地域社会における位置付けを歴史的に詳細に分析する。本課題の成果を用いて、現在の草津市で、引き継いでいくべき地域遺産の価値づけや、今後の観光資源としての名産品の見直しにも役立つことが期待できる。

ただし、本課題でおこなって来た作業に関して、草津市の観光に関わる関係者各位との連携は、現段階ではできていない。本課題で作成中の「納豆ガイドブック」について、今後どのような形で、具体的に利用することができるか、その可能性について、相談の機会を得られるように、関係者各位に連絡をとりつつ、本事業でおこなってきたことをより多く活用できる機会を模索していくことが今後の課題となる。

プロジェクト名（活動テーマ）： サステナビリティ・マップの創造 一言で言えない風景×都市住民をひきつける空き家×地域コミュニティカ	
SDGs 目標	      
提案者	: 滋賀大学経済学部 学生 東 彩美
自治体担当者	: 長浜市総務部政策デザイン課 山崎 悠司・宇野 みほ
連携大学担当者	: 滋賀大学経済学系 教授 森 宏一郎
発表者	: 滋賀大学経済学部 学生 東 彩美

1. 取組体制

本プロジェクトに参加している組織は、滋賀大学森ゼミナール・サステナビリティ研究室と長浜市役所である。森研究室は本プロジェクトの中心組織であり、この研究室に関わりのある学生たちが主体となって活動している。長浜市役所は森研究室の協働組織として、プロジェクトに必要な情報提供をおこなっている。

2. 背景・目的

本プロジェクトの目的は、地球規模で人類のサステナビリティを考慮して、長浜市のサステナビリティを捉えなおすことである。市町村規模でサステナビリティを議論するとき、多くの場合、部分最適として地域規模のサステナビリティが議論されることが多い。そこで、住民意識を調査し、現状を踏まえて、サステナビリティの三つの柱である「環境・経済・社会」を把握するためのマップ作成を通じて、長浜市のサステナブル・ストーリーを構築することを目指している。

3. 活動内容

滋賀県長浜市において、地域住民のインタビューとフィールド調査を実施している。この調査活動で、環境・経済・社会のバランスを考察している。

長浜市の中心市街地以外の異なる集落において、合計 24 件のインタビューを実施した。また、フィールド調査において、長浜市内のほぼ全ての集落を訪れ、環境・経済・社会のバランスを考えるために、1,000 枚超の写真撮影・約 40 サイトのサウンド・スケープ（環境音の情報）の記録をおこない、Google Map を活用して、写真・音と地理情報を整理した。この調査活動マップは、整理の上、公開する予定である。

さらに、ArcGIS（地理情報システムを活用するソフトの一つ）を使い、長浜市の現在の状況と将来の状況を考えるためのデータを地図上に可視化している。他の調査内容と合わせて、この可視化データに基づいて、サステナブル・ストーリーを検討している。

4. 成果と課題、今後の取組

成果物として、インタビュー情報の蓄積そのもの、写真・音と地理情報を記録した Google Map、サステナビリティの重要なデータを可視化した GIS マップがある。ただし、いずれも進行中である。

また、インタビュー調査の過程で、内保町の自治会長から内保町の自治の未来についてどう考えればよいかの提言がほしいとのリクエストを受けたため、内保町の自治のあり方に関するレポートを執筆し提示した。このレポートは長浜市役所にも参考資料として提出した。このレポートも超学際的アプローチ（利害関係者との協働）としての成果の一つである。

本プロジェクトは、長浜市の具体的なサステナブル・ストーリーを提案することが課題であるが、これまでの活動によって長浜市の姿をある程度捉えることができた。第一に、現状の長浜市はまだ都市域のスプロールが続いており、都市域と農村域の衝突が起きている。例えば、内保町には新興住宅地と伝統的な集落が接している境界線があり、新興住宅地の拡大するなかで、集落の自治をどう維持するかが課題となっている。どちらの集落も、内保町の住人であるにもかかわらず、異なる価値観とライフスタイルが形成されており、従来うまくいっていた町のルールが通用しなくなっているように見える。新興住宅地の拡大は経済の活性化とつながっているが、一方で、社会的結束の維持は環境保全の肝になっている可能性が高く、長浜市のサステナビリティの実現のために重点的に解決すべき問題である。

第二に、環境保全によって保たれている豊かな景観と人々間の社会的つながりには相互強化作用があるが、何らかの社会・経済的ショックによりどちらかに歪みが生まると、双方が弱体化する負のサイクルが発生し得る。例えば、ある程度経済的に犠牲を払いながら美しい水田景観を維持してきたことによって、社会的な協働を実現してきた事実がある。しかし、経済的採算性が著しく悪化すると水田景観を維持できず、見た目が悪い耕作放棄地の存在が社会的つながりを弱体化させることになる。事実、そのリスクをインタビューで聞き取っている。人々が社会的に豊かに居住し続けられるように、この負のサイクルを阻止するためのストーリーを提示する必要がある。

最後に、他の地域ではあまり見られない神事「オコナイ」が現代的文脈で形骸化している面があるが、むしろ、この地域のシンボルとして外部の人々を観衆として巻き込める形に進化させる時期に来ているのではないか。インタビューを通じて、勤め人が増え、人口が減少し、高齢化が進んだため、柔軟にオコナイの形を変えてきていることが分かったが、そのことがオコナイ自体の魅力を引き下げていると考えられる。そこで、オコナイを外に開かれた耳目を集めるイベントとして再構築し、まずは外から多くの人々に注目されることが重要である。その結果、地域に溶け込みたい移住者が生まれれば、持続可能な地域社会になるだろう。オコナイを含めて、地域の伝統知をどのように活かすかを再考する必要がある。

今後の取組は、これまで蓄積してきている種々の情報（写真・音、インタビュー情報、可視化 GIS マップ、仮説）をどのように整理するかを熟慮し、サステナビリティ・マップの創造とサステナブル・ストーリーの構築をおこなう。

No. 9

プロジェクト名（活動テーマ）：	
十人十色プロジェクト（性の多様性を知ってもらおう！）	
SDGs 目標	
提案者	彦根市
自治体担当者	彦根市人権政策課 課長補佐 佐伯祐子、人権啓発係長 山本武
連携大学担当者	聖泉大学人間学部 准教授 富川拓
発表者	聖泉大学人間学部富川ゼミ、彦根市

1. 取組体制

・彦根市人権政策課、聖泉大学人間学部 富川ゼミ、企業（2年目）

行政が活動の中核となり、大学（学生、教員）と協働して取り組みを企画・運営し、学生が主体となって、企業とともに啓発活動や情報発信を行います。

2. 背景・目的

近年、社会的な認識が進んではきたものの、依然として、差別や偏見によって、性的マイノリティの方が困難を抱える状況は少なくないと言われています。彦根市が令和3年度にパートナーシップ制度を導入するのに合わせてLGBTQへの理解を深めてもらう取組を進めます。

3. 活動内容

①意見交流会の開催

聖泉大学富川ゼミと彦根市との意見交流会を実施しています。

第1回 意見交換会 2021年4月28日（水）16時20分から17時50分まで

第2回 意見交換会 2021年6月30日（水）14時40分から16時10分まで

第3回 意見交換会 2021年7月21日（水）16時20分から17時50分まで

参加者：富川ゼミ（学生、教員）、彦根市職員



②情報発信 FM ラジオの番組制作

FM ひこねのラジオ番組を制作し、周知・啓発を目的とした情報発信を行っています。



第1回 2021年6月10日放送

内容：人間学部富川ゼミの活動について、十人十色プロジェクト（性の多様性を知ってもらおう！）について

第2回 2021年8月12日放送

内容：彦根市パートナーシップ宣誓制度（案）について、パブリックコメントについて

第3回 2021年10月21日放送


内容：彦根市パートナーシップ宣誓制度の開始、制度の概要、パブリックコメントの結果について

4. 成果と課題、今後の取組

富川ゼミと彦根市との意見交流会を定期的で開催し、ジェンダー平等に対する理解を深め、彦根市パートナーシップ宣誓制度の啓発方法等について、検討することができました。またラジオ番組を制作・放送することにより、実際に周知・啓発を進めることができました。企業への協力依頼や、コロナ禍のために実施できなかった先進地の視察等が今後の課題です。

講演会など、啓発を目的としたイベントを企画し、2022年2月頃に実施する予定です。



プロジェクト名（活動テーマ）：	
Explore Hikone!!～地域マップの多言語化を通して多文化共生をすすめよう～	
SDGs 目標	: 
提案者	: 彦根市
自治体担当者	: 彦根市人権政策課 課長補佐兼多文化共生係長 佐伯 祐子
連携大学担当者	: 滋賀県立大学人間文化学部国際コミュニケーション学科教員 河かおる
発表者	: びわこまち（国際交流サークル）代表 堤将太

1. 取組体制

- ・びわこまち（国際交流サークル）
- ・滋賀県立大学
- ・彦根市人権政策課
- ・多文化共生サポーター（地域住民）

行政を中心に学生・大学・行政・市民が協働して企画・運営し、地域の住民を巻き込んで、学生が主体的に活動を実施。

国際交流サークル・びわこまちの学生に加え、大学担当者が行う授業「多文化共生論」「多文化社会論 A」（いずれも前期開講）でも参加学生を募る。また、国際化推進室を通じて留学生の参加も促す。さらに学生が主体で活動する滋賀県立大学の学生教育プログラム「近江楽座」のプロジェクトなど学内の他の取り組みと積極的に連携しながら情報発信をしていく。

※この項目は活動提案書のまま

2. 背景・目的

市内地図等の多くが日本語、または、英語などの限られた言語で記載されており、他言語を使用する外国人住民は利用できない状況である。地域の情報を多言語で提供することで、在住外国人に市内の魅力を見出し、愛着を持ってもらえる機会の創出につながる。また、地域を知ること、外国人住民が自ら災害から身を守るという副次的な効果も期待する。

また、外国人目線でのおすすめポイントなどを紹介し、多文化共生の推進を図る。

※この項目は活動提案書のまま

3. 活動内容

2021年5月に、市担当者、大学担当者、学生メンバーの初顔あわせと今後に向けてのブレインストーミングを実施し、次のようなことについて方向性を確認した。

◆マップの形態について

スマートフォン等で気軽に確認できるように、Google マップを利用して公開するとともに、親しみやすいデザインの印刷用の地図も作成し、印刷配布するとともに PDF で公開するという出来上がりイメージを確認した。Google マップ版と PDF 版の両方を作成して公開している他自

治体の参考事例としては、静岡市の「おいしい多文化交流！静岡市エスニックレストランマップ」(https://www.city.shizuoka.lg.jp/799_000117.html)がある(ただし多言語版はなし)。

◆マップに盛り込む内容について

「彦根まっぷ」(<https://www2.wagmap.jp/hikone/Portal>、日本語のみ)を参考に、防災、防犯、子育て、教育、福祉など、観光客ではなく生活者として暮らす上で必要な情報をピックアップして多言語マップにプロットしていくことにした。他自治体の参考事例としては、恵庭市の「多言語生活情報マップ」(https://www.city.eniwa.hokkaido.jp/soshikikarasagasu/kikakus_hinkoubu/kikakuka/shimaitoshi_yukotoshi_kokusaikoryu/1/2327.html)がある。

その後、新型コロナウイルス感染症の拡大もあり、活動がストップした状態になってしまったが、11月から仕切り直しで再始動した。年度末まで時間も限られていることから、ターゲットとする「彦根に暮らす外国人住民」を、ひとまず滋賀県立大学の外国人留学生に絞り、滋賀県立大学の学生の主な活動範囲について、「こんな地図があったら、彦根で生活を始める留学生が助かるだろう」というイメージで、滋賀県立大学の国際交流サークルである「びわこまち」の学生主体でマップを作成していくことにした。

外国人留学生や教員などに対し、どういう情報が入っているとよいかなどをヒアリングし、大学周辺、ベルロード、くすのき通り、南彦根駅などを中心に、どういう施設や店舗等をマップに入れるかの検討を開始した。実際に、南彦根駅周辺の飲食店には、電話をして、英語表記のメニューがあるのか、英語を話せる人はいるのか聞き取る活動を開始した。また、「やさしい日本語」を普及し、協力してくれる店舗等を増やしてマップで紹介することを将来的な目標とし、「やさしい日本語」研修開催の準備を進めている。

4. 成果と課題、今後の取組

Google マップで、「(彦根市)多言語生活情報マップ」を仮作成した。

https://www.google.com/maps/d/u/0/viewer?mid=1xabI0xeTsH_a0UGs2KJ3tAe6nJG-4i0l&ll=35.244600415155936%2C136.21351179999996&z=13

今後、ここに情報を追加しながら、最終的に紙(PDF)版の多言語マップに掲載する内容を検討していく。

また、「やさしい日本語」の研修を実施する。

プロジェクト名（活動テーマ）：	
地域の笑顔を SNS で届ける—シニアボランティアの ICT ツール習得支援—	
SDGs 目標	    
提案者	龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科 坂本ゼミ生
自治体担当者	滋賀県健康医療福祉部医療福祉推進課企画係 主査 増本喜久
連携大学担当者	龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科 准教授 坂本清彦
発表者	龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科 4 回生 出原杏奈

1. 取組体制

龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科坂本ゼミメンバー（3・4 回生計 29 名）が、レイカディア大学同窓会大津支部の知名度向上チームメンバーと連携して本プロジェクトを実施している。レイカディア大学は、滋賀県内の高齢者が地域活動に必要な知識スキルを学ぶ場で、その卒業生たちが県内各地の同窓会支部を拠点に地域ボランティア活動に携わっている。レイカディア大学を運営する滋賀県社会福祉協議会や龍谷大学エクステンションセンター（REC）の協力も得ながら、本プロジェクトの活動を進めてきたところである。

2. 背景・目的

レイカディア大学同窓会大津支部（以下、同窓会大津支部）は知名度向上や活動拡大のため SNS の活用を望んでいるが、アプリ等の利用方法に習熟していない。そのため坂本ゼミメンバーが、同支部メンバーが不慣れな SNS などの使用方法習得を支援する。具体的には、坂本ゼミメンバーが SNS（Instagram 等）やオンライン会議ツール（Zoom 等）、効果的な ICT ツールの利用や情報発信手法の習得を支援し、学生・シニア協働でボランティア活動での「笑顔」を撮影、SNS で「笑顔」コンテストを開催し、ボランティア活動の価値の発信、認知向上、拡大を図る。シニアは ICT スキル、学生はイベントの企画・運営・調整力などをお互いに学び、相乗的に能力を向上させる。

3. 活動内容

4 月の坂本ゼミ発足時に、ゼミメンバー 30 名のうち 6 名が本プロジェクトの企画運営チームを組んで活動を進めることとした。

6 月 17 日（木）2 講時にゼミメンバーと同窓会大津支部メンバーと顔合わせやアイスブレイクを通じて親睦を図った。その後 6 月 28 日、7 月 19 日、8 月 31 日に企画運営チームメンバーと同窓会大津支部メンバーがミーティングを開き、同支部メンバー向けに Zoom と LINE の使用方法を学ぶ予備ワークショップ（WS）を 10 月 14 日に行うこととし、その内容等について議論した。企画運営チームを中心に予備 WS の内容を固め、10 月 14 日（木）2 講時の坂本ゼミにおいて、同窓会大津支部メンバー向けに WS を開催、学生たちが Zoom と LINE のパソコンでの使用方法習得を支援した。なお、これらの活動は、新型コロナウイルス感染防止のためオンラインで実施した。

4. 成果と課題、今後の取組

新型コロナウイルス感染対策のためオンラインで実施した10月14日の予備WSは、オンラインツールの使用方法をオンラインで学ぶという困難な状況だったが、学生メンバーは丁寧に同窓会大津支部の方々にZoomとLINEの使い方を教えた。

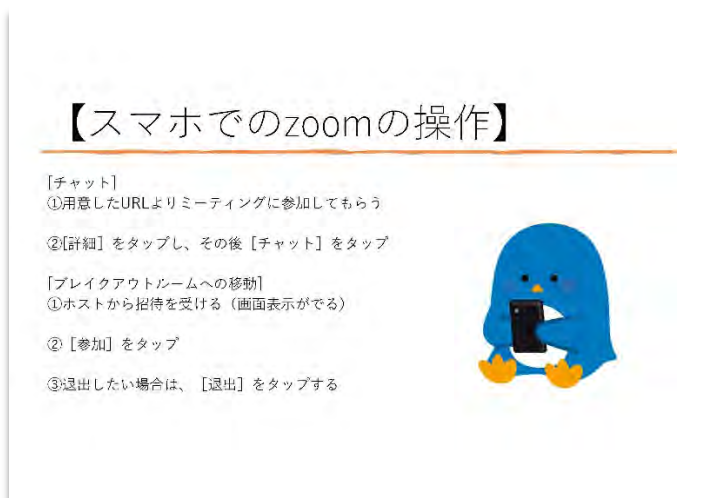
その結果、LINEのパソコンでの使用とZoomのブレイクアウトルームおよびホストとしてのミーティング開催方法を習得してもらうという当初の目的をおおむね達成できた。学生メンバーは資料の作成からツール使用方法の説明まで、シニアの方々が学びやすい形でのコミュニケーション力を向上させることができた。

これらの経験をふまえ、12月11日(土)には、対面で同窓会大津支部以外のレイカディア大学卒業生や一般の高齢者も対象としたWSを開催予定である。




今後は、学生がシニアに教えるだけでなく、学生から使用方法を学んだシニアが、他の仲間にICTツール習得の輪を広げていけるよう活動を仕組んでいく予定である。



10月14日にオンラインで行った予備WSの様様



10月14日の予備WS用に学生が準備した資料(パワーポイント)の一部

プロジェクト名（活動テーマ）： 東近江市中心市街地活性化に関する実証的研究	
SDGs 目標	  
提案者	: びわこ学院大学 学長 沖田 行司
自治体担当者	: 東近江市中心市街地整備課 課長 植田光彦
連携大学担当者	: びわこ学院大学・教育福祉学部 教授 パン ジュイン
発表者	: びわこ学院大学・教育福祉学部 3 年生 井上 駆

1. 取組体制

取組体制及び役割分担は以下の通りである。

- ・びわこ学院大学
調査及び研究設計、フィールドワーク実施、データの取りまとめ、データ分析
- ・東近江市中心市街地整備課、（一般社団法人）八日市まちづくり公社
基礎データの提供及び地域住民組織との調整役、調査協力、分析補助

2. 背景・目的

近年、人口減少や人口の大都市過集中に伴い、地方都市の消費は地域外に流出し、商業の衰退をもたらしてきた。それらは地域経済や地域住民の生活に大きな影響を与えている。東近江市も市民の消費、飲食やレジャーは他の市への流出傾向がある。本研究では、地域のにぎわいを取り戻すことを目的に、東近江市中心市街地、とりわけ近江鉄道八日市駅周辺を調査し、学生の視点で「様々な世代および多様な人々が訪れたい所」になる方策を探っていく。

3. 活動内容

コロナ禍でフィールドワーク調査に制限がかかったため、調査内容は近江鉄道八日市駅から電気機関車近江鉄道 ED314 の保存場所である近江酒造までの周遊ルートの策定に集中した。2021 年 5 月 29 日（土）に一回、実施した後、非常事態宣言が発令され、調査再開は 10 月となった。2021 年 10 月 24 日（日）と 2021 年 11 月 6 日（土）の 2 回、フィールドワーク調査を実施した。また近江鉄道の利用促進と中心市街地活性化のため、2021 年 11 月 13 日（土）近江鉄道株式会社の社員と市民有志と一緒に近江鉄道大学前駅を清掃整備した。

また、プロジェクト担当者が担当している講義科目「地域社会学」と「東近江の地域学」と連携して調査を行った。授業には東近江市中心市街地整備課、企画課、公共交通政策課の職員を招いて、東近江市の概況や中心市街地活性化の取組み、公共交通の現状について講演をしていただいた。また、本町商店街で商売をしている住民にも講演していただき、現地の住民の視点で地域活性化について受講生たちと一緒に議論を行った。これらの知識によって東近江市をより理解でき、今後のフィールドワークもスムーズに行われると考えられる。



御代参街道



ED314 運転室



FOUTY NINERS



聞き取り調査（近江酒造）



現地調査

聞き取り調査（本町商店街）

延命新地

本町商店街



大学前駅清掃活動

大学前駅清掃活動

大学前駅（ビフォー）

大学前駅（アフター）

4. 成果と課題、今後の取組


3回のフィールドワークを通して、下図のように近江鉄道八日市駅から近江鉄道 ED314 の保存場所である近江酒造までの周遊ルートを作成した。この周遊ルートを制作する企図は、八日市駅と近江酒造の二つの点を周遊ルートで線に結び、人流が発生することで、今後、線の周辺地域へも新たな店舗開業希望者が生まれるなどの経済効果が波及し、今後の近江鉄道の利用促進と八日市駅周辺の活性化につながることにある。



周遊ルートマップでは、八日市駅周辺から近江酒造までの、現状の沿線の観光スポットと飲食店をピックアップしている。数字は観測地点までの所要時間を明記、観光スポットと店の紹介文を掲載する。

現時点では、周遊ルートの決定と周辺観光スポットおよび店舗の選定は完了、所要時間測定も終了した。周遊ルートは、赤の線と青の線で分け、行き帰りのルートを別にし、観光客自身が選択できるようにした。数字は、所要時間である。

今後、観光スポットの歴史など調べ、説明文を作成する。また、店舗を取材し、紹介文を学生と経営者との協働作業により作成をする予定である。

プロジェクト名（活動テーマ）： 子どもの手がた足がたを用いたオリジナルグッズづくりを通して、楽しもう、知ろう、 広めようオレンジリボン運動×SDGs	
SDGs 目標	
提案者	びわこ学院大学 教育福祉学部 講師 榎本祐子
自治体担当者	東近江市役所こども未来部こども相談支援課 管理監・河合 喜久子
連携大学担当者	びわこ学院大学 地域連携研究支援課 今若彦二
発表者	びわこ学院大学 中尾志奈 川東結惟

1. 取組体制

事業の計画と実施：びわこ学院大学子ども学科・榎本ゼミ3年生（及び学内の学生サポーター）

連携：東近江市こども相談支援課・職員

事業総括：びわこ学院大学子ども学科・講師榎本祐子

2. 背景・目的

榎本ゼミでは、子育てを地域で支えることが子育てのしやすさや虐待防止につながると考え、東近江市こども相談支援課と連携しながら、地域の大学生が子育て家庭のためにできることをすることを目指している。具体的には、児童虐待防止啓発活動であるオレンジリボン運動やSDGsを広めながら子育て家庭が楽しめるイベントを企画したいと考えた。今年度のメインの活動は、オレンジリボン×SDGs マークつきのエコバッグに子どもたちが手がた or 足がたを押すイベントを実施することである。

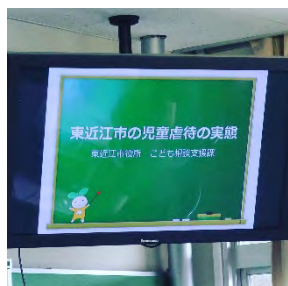
3. 活動内容

今年度の主な活動内容

- ① 東近江市こども相談支援課から児童虐待およびその対応の実態に関する学び（6月実施）
- ② オレンジリボン運動インスタグラムの運営
- ③ オレンジリボン運動×SDGs エコバッグ作成イベントの実施（11月12月に計3か所で実施）
- ④ オレンジリボン運動かるたの作成（1か所で無料のかるたイベント実施予定）

4. 成果と課題、今後の取組

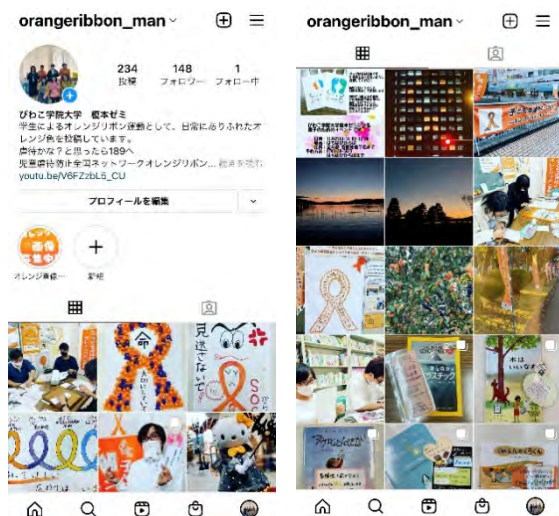
- ①東近江市こども相談支援課から市内の児童虐待およびその対応の実態に関する学び



東近江市こども相談支援課との協働の1歩として、6月30日（水）13時から14時30分のゼミの時間にこども相談支援課の職員3名に來学してもらい、東近江市の児童虐待の現状について話をもらった。

また、学生からは今年度の協働の内容についての相談をした。

② オレンジリボン運動インスタグラムの運営



主にこれから親になる若い世代にオレンジリボン運動について周知することを目的に、ゼミでの活動をインスタグラムで発信している。インスタグラムのコンセプトはオレンジリボン運動を啓発するであったが、今年度はSDGsについて啓発する内容もある。具体的には、ゼミの取り組みの紹介、SDGsに関する絵本等のPOPの紹介などをおこなった。

フォロワー数は2021年11月20日現在で147名である。

④ オレンジリボン運動×SDGsエコバッグ作成イベントの実施

11月24日（水）八日市子育て支援センターで実施した。参加者：子ども36名とその保護者





オレンジリボンとSDGsマークをあしらったエコバッグに子どもたちの足形を押していった。当日は連携先の東近江市こども相談支援課がみらいちゃんも連れてきてくれ、子どもたちに大人気であった。

⑤ オレンジリボン運動かるたの作成

かるたづくりは当初案にはなかったが、東近江市こども相談支援課との連携の中で、東近江市内の小学4年生が作成している人権標語を使ってかるたを作成する案が浮上した。50音で標語にないものは、社会福祉援助技術演習Ⅱを履修している学生が考えた。また、絵は学内で協力者を募り、ゼミ生以外の6名の方に協力してもらった。また、空き時間を利用してゼミ生以外もこの活動に協力してくれる人が出てきて、活動の輪が広がっている。



プロジェクト名（活動テーマ）： ポストコロナにおける大学生によるカナヅチ児童を対象とした水泳教室 ～運動介入による小大連携への模索～	
SDGs 目標	:  
提案者	: びわこ学院大学 教授 吉見 謙
自治体担当者	: 東近江市 教育委員会事務局 学校教育課 参事 西川 基史
連携大学担当者	: びわこ学院大学 地域連携研究支援課 今若 彦二
発表者	: びわこ学院大学 北林 真希

1. 取組体制

びわこ学院大学 吉見謙（プログラムの統括、指導内容、指導員募集、データ収集および分析）
 東近江市教育委員会事務局学校教育課（プログラムへの助言、小学校との調整）
 東近江市立布引小学校（プログラムへの助言、参加者の募集、施設管理）

2. 背景・目的

2019 年末からのコロナ禍により、学校における活動の多くが制限されることとなった。対人接触のある体育授業は困難が多く、その中でも水泳授業の実施は非常に難しい状況となった。本年含めて夏の 2 シーズンをコロナ禍で過ごすこととなったため、水泳授業の機会が少なく、泳ぎを習得することができなかった児童も多かったと予想される。児童の泳力については、スイミングスクールの普及による泳力の二極化や、進学に伴う水泳授業実施率の低下が報告されている。そのため、小学校高学年以降で泳ぎを苦手としている児童は、運動に対する持ち越し効果の点からも泳ぎを習得することが望まれる。そこで、本プロジェクトでは水泳を苦手としている小学生高学年を対象に、教員志望の大学生による水泳教室を開催し、泳法習得の機会を提供するとともに、効果的なプログラムの開発および水泳教室を実施する上での課題を明らかにすることを目的とした。

3. 活動内容

水泳教室は、7 月上旬、小学校の授業終了後に計 4 回、東近江市立布引小学校のプールで実施された。実施に先立ち、指導を担当する学生は事前研修に参加し、①消防署による普通救命講習、②プールにおける安全管理・コロナ感染予防対策・事故対応、③プールにおける指導法を受講した。参加者の募集は、布引小学校の 5・6 年生を対象に、各クラス担任より募集要項を配布し募った。指導学生 9 名、参加者 7 名で実施した。


コロナ感染予防対策として、文部科学省（2020）で示された衛生マニュアルに準じて対策を講じ、さらに水泳用マスクを着用するなどして指導を行なった。

4. 成果と課題、今後の取組

水泳指導の経験が少ない大学生による水泳教室であったが、参加した児童の泳力向上（クロール泳で泳距離が7.8mから30.0m、25mを完泳した児童5名/7名）および水泳に対する苦手意識に改善がみられた。また、学生に対するアンケートから、水泳指導の難しさを実体験として感じたことが伺えた。児童および学生のアンケートから、習得の難しいあるいは指導の難しいと感じられたクロール泳の動作が、息継ぎであるとの回答が多かった。しかし、泳力チェックの動画より教員が行なった観察的動作評価からは、ストローク動作（主に腕のタイミング）が習得されていないことが呼吸動作の習得を妨げていることが推測された。

今後の課題としては、児童の効果的な泳法習得の面では、指導を担う学生を対象とした事前研修において、呼吸動作およびストローク動作の指導プログラムを充実させることが求められる。また、運営面においては、施設の活用において施設管理を担う教員の勤務との関係で開催期間が限られることや、運営のより多くの部分を学生に委ねられるような教育やシステムづくりが必要であると考えられた。



プロジェクト名（活動テーマ）： いきいき生活プロジェクト～頭と体のリフレッシュ～	
SDGs 目標	: 
提案者	: びわこリハビリテーション専門職大学 理学療法学科 学科長 山内 正雄 作業療法学科 助教 木岡 和実
自治体担当者	: 東近江市健康福祉部長寿福祉課 参事 松浦 正江
連携大学担当者	: びわこリハビリテーション専門職大学 事務センター センター長 代理 岩崎 康司
発表者	: びわこリハビリテーション専門職大学 理学療法学科 2年 川端 空

1. 取組体制

びわこリハビリテーション専門職大学の理学療法学科、作業療法学科の教員および学生、東近江市市長寿福祉課及び健康推進課職員と共同で行う。

【役割分担】

- ① 講座の運営：びわこリハビリテーション専門職大学
講義：びわこリハビリテーション専門職大学および東近江市
体操：学生スタッフ
- ② 指導・助言：東近江市

2. 背景・目的

- ① 滋賀県の高齢化率は 2025 年度まで上昇し、それに伴って 4 人に 1 人が認知症高齢者になると推測されている。現在、認知症の完治は難しいことから、認知症医療の充実に対する県民の期待も高い。本事業目的は頭を使った運動や活動を通じた身体・認知機能の低下防止と生活習慣の見直しにより高齢者の認知症発症を予防することである。
- ② 加齢に伴う変化として、運動機能や認知機能などの低下により、日常生活機能や心身機能が低下する「フレイル」の概念が提唱されている。特に運動機能の低下は、転倒や外出の制約につながり、閉じこもりを誘発し、要支援や要介護の状態につながりやすい。そのため、本事業では、「フレイル」につながりやすい運動機能低下、バランス能力の低下、認知機能の低下を防止し、健康寿命の延伸を目指す。

3. 活動内容

5月から大学と自治体で打ち合わせを進め、プログラムを決定し、8月に受講生を募集した。対象は65歳以上。予定していた定員30名を超えて37名の申し込みがあった。

9月から12月までの期間で全7回を実施し、講義の開始前には学生と東近江市の保健師が血圧測定を行う。測定結果は初回に配布した血圧手帳に記録する。

各回とも講義と体操で構成し、体操は学生が中心となり実施する。



※開始前の血圧測定



※びわこすっきり体操

年月日	講義テーマと内容
2021年9月11日(土) 14:00~16:00	①「ちょっとだけ知ってほしい 高血圧の話」東近江市健康推進課 梅辻はる香 ②「フレイルの予防～健康寿命を延ばすための運動～」理学療法学科 佐藤隆彦
2021年9月23日(木) 14:00~16:00	①「認知症は予防できる？」東近江市長寿福祉課 松浦正江 ②「年相応と認知症の差～予防に向けた第1歩～」作業療法学科 前田浩二
2021年10月2日(土) 14:00~16:00	①「認知症予防につながる運動とは」東近江市長寿福祉課 松浦正江 ②「頭を使って、体を使おう」作業療法学科 木岡和実
2021年10月16日(土) 14:00~16:00	①「認知症予防に効果のある栄養は何か」東近江市長寿福祉課 松浦正江 ②「フレイル予防のための栄養面からのアプローチ」理学療法学科 兼清健志
2021年11月6日(土) 14:00~16:00	①「口腔ケアでフレイルを予防しよう！」歯科衛生士 向井恵子 ②「フレイルの予防～筋トレの基礎と注意点～」理学療法学科 山内正雄
2021年11月27日(土) 14:00~16:00	①「骨折予防～重力に負けない身体づくり～」東近江市健康推進課 梅辻はる香 ②「繋がり合いで認知症予防」作業療法学科 鈴木耕平
2021年12月4日(土) 14:00~16:00	①「これからも続けようフレイル予防」東近江市健康推進課 木下幸代 ②「フレイルの予防～こけないための足づくり～」理学療法学科 池谷雅江

※各回ともに八日市商工会議所4回ホールにて実施


4. 成果と課題、今後の取組

毎回のアンケートにおいて、フレイル予防の体操を自宅で行っている人は50%程度であった。理由としては、自宅において一人で体操を継続して行うことが困難な高齢者が多かった。

今後、自宅でフレイル予防体操を継続的にできるように、映像配信など何らかの方策を考えていく必要がある。

また、一人で体操を行うことが困難な方も少なくないため、必要に応じてフレイル予防体操などを実施している地区との連携を模索する。

No. 16

プロジェクト名（活動テーマ）： びわ湖の森の生き物「トチノキ」の電顕画像を発信する	
SDGs 目標	: 
提案者	: 奈良 篤樹（長浜バイオ大学 オルガネラ構造機能研究室）
自治体担当者	: 伊藤 真一（長浜市 産業観光部 森林田園整備課）
連携大学担当者	: 熊崎 厚作（長浜バイオ大学 地域連携・産官学連携推進室）
発表者	: 中臣 俊輔, 中村 頌, 松井 幹典（長浜バイオ大学 4 年生）

1. 取組体制

長浜バイオ大学・オルガネラ構造機能研究室：

（役割）課題の統括と運営，試料採取，実地調査，電顕観察，資料作成

自治体（長浜市）：

（役割）森林マッチングセンターをはじめとする森林管理等の活動を行っている団体の情報提供や紹介を行う。

2. 背景・目的

びわ湖を創る水は，取り囲む森林の豊かさによる。トチノキは長寿の樹木であり，びわ湖の水環境だけでなく，地域の暮らしに根付いた役割を果たす。しかし，気候環境の変化等によって，トチノキは失われつつある。本取組みの目的は，トチノキの電子顕微鏡写真を広く発信するという新奇の方法から，トチノキ保全を目指す。

3. 活動内容

本取り組みは，巨木トチノキ保全を目指すために，トチノキをサンプルとして電子顕微鏡画像を取得し，SNS 等を利用して広く発信することである。そこで，下記の①～③の活動を行った。

①巨木トチノキを知るための巨木トチノキ探訪

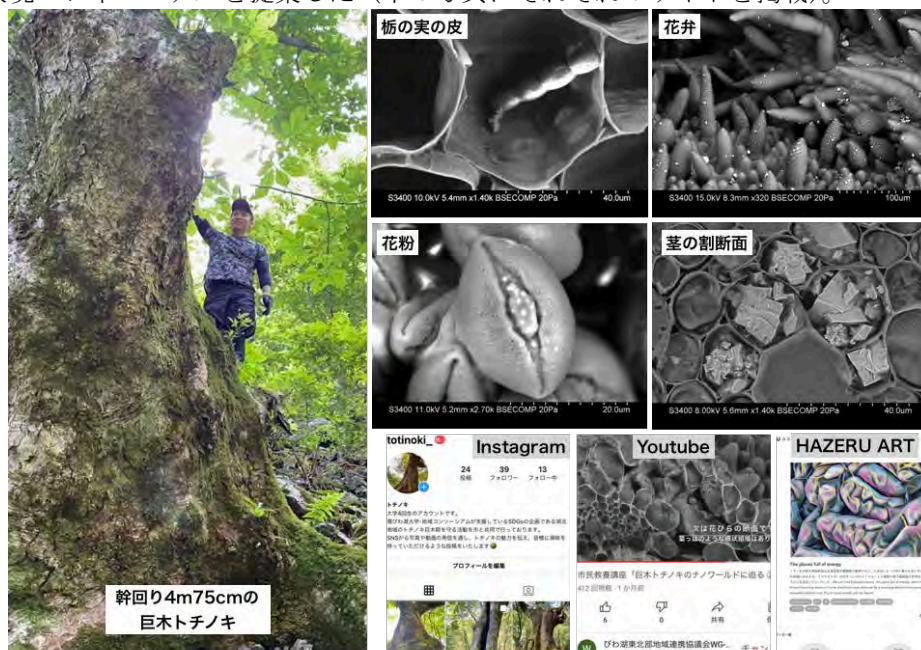
滋賀県木之本町金居原地区の森（土倉の森）に育つ巨木トチノキの場所まで行った。旧土倉鉦山跡付近に車を止め，杉野川沿いの登山道を歩いた。およそ2時間で巨木トチノキに出会えた。幹回りは，4メートル75センチであった（6/23，次頁写真を掲載）。また，別日に行ったトチノキ探訪では，土倉の森最大級の巨木トチノキの場所まで行った（6メートル40センチ）。

②巨木トチノキサンプルの電子顕微鏡観察

電子顕微鏡は，本学設置の日立 S-3400N 走査型電子顕微鏡を用いた。走査型電子顕微鏡の特徴は，ものの表面を観察できることである。そこで，トチノキの樹皮，花卉，花粉，葉，冬芽を使って観察した。本顕微鏡は，液体窒素（-198℃）で凍結したクライオサンプルを使用した観察も可能である。電子線照射によるダメージが考えられる花卉や茎，またこれらの断面を観察した（次頁に電顕画像を一部掲載）。

③トチノキ電子顕微鏡画像の SNS 発信と、電子顕微鏡画像を使ったビジネスモデル

巨木トチノキ試料を走査型電子顕微鏡で観察した画像や動画を SNS 発信し、巨木トチノキの新しい魅力を伝えた。現在、Instagram(アカウント:totinoki_)を中心に発信しており、Youtube においては市民教養講座として発信した。10/22-23 愛知県常滑市で開催された SDGs Aichi EXPO に出展し、多くの来場者に本活動を伝えた。また、電子顕微鏡画像をグッズとして売り出し発信する「木を切らない森林ビジネス」の試みを 11 月から始め、HAZERU ART サイトから T シャツ等のグッズの販売を行っている。グッズ販売によって得られた収益の一部を巨木トチノキ保全に当てる環境ビジネスモデルを提案した (下の写真にそれぞれのサイトを掲載)。





4. 成果と課題、今後の取組

成果：本取り組みによる成果は、(1)巨木トチノキ画像の発信、(2)巨木トチノキの走査型電子顕微鏡画像解析と発信、である。電子顕微鏡画像の発信をしていくと、地域の文化や歴史を同時に知ることになり、地域や地元の団体とのコミュニケーションの重要性に気がついたことも成果である。つまり、(3)地域の同志とのコミュニケーション及びパートナーシップを形成し、(4)地元自然環境団体から市や県等との緊密な連携をはかることができた。(3)(4)は、SDGs 取組目標 17 にもある「パートナーシップ地元事業との協力とイノベーション」に深く関連する内容であり、本取り組みは、他の SDGs の取り組み目標にも波及することとなった。

課題：SDGs 取組目標 15 に関する「巨木トチノキが持続的に生命活動可能となる環境の整備」や、「周辺にすむ生物の多様性の保全」については、課題が多い。具体的には、どう環境整備し共存するのか、加えて巨木トチノキがもたらす自然環境に恩恵を受ける生物種の理解等に取り組む必要がある。また、SNS 発信による視聴者からの意見のフィードバックについては、あまり意見が得られていないことから試みが十分に動いているとは言えない。これらについては今後、SNS 発信をさらにわかりやすくするとともに、地域・地元団体へ取り組みを伝えていくことで意見を出しやすい環境づくりに努める。

今後の取組：本取り組みはまだ半年ほどしか経過しておらず、トチノキの一年を電子顕微鏡で撮影できていない。今後、秋～冬のトチノキの試料を電子顕微鏡で撮影し、発信する。また、本取り組みを広く伝えるために、取組レポートの作成を行う予定である。以上の発信をさらに行うことで SDGs に関する啓発活動を推進する。次年度以降については、次世代環境リーダー育成のために、地元小中学生を対象とした電子顕微鏡操作体験事業を行うことで、巨木トチノキの新しい魅力を体感する機会を提供する。地域・地元とのパートナーシップを取りつつ次世代への環境教育を進め、理科教育を介したホスピタリティー溢れる人材育成に力を入れる。

プロジェクト名（活動テーマ）：	
河川再生プロジェクトと科学に対する学びの場の提供	
SDGs 目標	 
提案者	：長浜バイオ大学 学長：蔡 晃植
自治体担当者	：長浜市市民協働部市民活躍課ながはま市民協働センター 川瀬 智久
連携大学担当者	：長浜バイオ大学 地域連携・産官学連携推進室：熊崎 厚作
発表者	：長浜バイオ大学 未来生物学研究所 副所長：原口 大生

1. 取組体制

未来生物学研究所は環境問題を科学によって解決を試みる滋賀県立大学や長浜バイオ大学などの学生を含む学生団体である。当団体は環境保全に対し創造的活動を行い、生物多様性の維持に寄与することを目的とした地域住民による任意団体である近江淡水生物研究所、地域団体などとともに学びの場や水槽展示、河川の掃除、生態捕獲・環境 DNA による定期調査、調査動画を掲載する。長浜バイオ大学は本取組のためにセミナーやイベントなどの開催時に場所や機材の提供をする。長浜市役所は広報活動の支援をお願いし、小中学校などへのイベントチラシ配布の協力をお願いする。

2. 背景・目的

長浜駅前に流れる米川は、かつて生態系豊かで子供たちの学びの場となっていた。しかし、近年の駅前開発により生き物は減少し、子供たちも遊ばなくなっていた。そこで私たちは河川の整備等を行い、さらに子供たちが科学を学べる場を提供する。そして、人と共存する生物や「理系人材の育成」として科学に関心を持つ人を増やす。

3. 活動内容

河川ゆかりの生物生息状況及び生物多様性維持につながる自然環境調査と掃除をすることで、生息実態の把握と生物の住みやすい河川づくりを行う。そして、生息実態の整理をし、活動調査及び保護情報などの情報を公共資料化する。また、河川に生息する生物を観察できる水槽の展示とセミナーやイベントを開催することで科学に関心を持ってもらう。これらの活動を通して、環境の保全や社会教育の推進、子どもの健全育成を図る。

4. 成果と課題、今後の取組

・成果

現在までに、私たちは毎月米川の生態調査とゴミ拾い、5/24 環境 DNA 解析用米川の水回収、8/2 子供たち向け米川生態調査（写真 1）、8/8 米川フォーラム（図 1）、9/19 水流変化による住処づくり（バープ工）、10/10 水槽展示開始、11/12 地元保育園児向けセミナー（写真 2）、11/15 環境 DNA 解析用米川の水回収、11/19 地元保育園児向けセミナーなどを計画・実行してきました。

8/2 の子供たち向けの米川生態調査は地元団体やボランティアと協力し、子供たちが網を持って川に入り、生物を捕獲してもらいました。私たちは網を使った追い込み捕獲の方法を子供たちに指導しました。また、中には子供だけでなく保護者の方々も胴長を購入して、夢中になって生態調査を行っていました。そして、生物捕獲後はえきまちテラス長浜広場にて生物同定を行い、自由研究などに役立ててもらうために、記録メモを持ち帰ってもらいました。

8/8 米川フォーラムに関しては、早期から地元団体有志らと共に何度も打ち合わせをして、米川を中心として街を盛り上げるべく計画しておりました。私たちはサイエンスカフェと称して、来客に対して一緒に米川に入って生態調査・水槽展示、顕微鏡による観察を予定していました。しかし、直前に滋賀県にも緊急事態宣言が発令されたため、やむを得なく来年度へ延期することとなりました。

11/12,19 地元保育園児向けセミナーでは地元保育園児たちの遠足も兼ねて、水槽展示スペースにて魚の説明などを行いました。園児たちは楽しく学んでいただけたと感じております。また、この水槽展示スペースは長浜駅近くにあることから、多くの方々に足を運んでいただけています。

・課題

メンバーが少ないこともあり、単独でのイベント開催が難しく、他団体やボランティアと協力して行っています。また、急に緊急事態宣言が発令されてしまうと対応できなく、中止せざるを得ない状況です。生態調査の結果から、夏秋には鮎が多くいたが、11 月頃から米川にいる魚は、ほとんどブラックバスでした。

・今後の取組

引き続き、滋賀県下の河川の調査・保護を他の協力の下で行います。様々な環境問題を解決するためには、まず「滋賀県の淡水生物にふれること、知ってもらうこと」が必要だと考えられます。そのため、若者には SNS や体験などを通じて、大人には講座や勉強会などを通じて、現状を知ってもらいたいと考えています。





写真 1：えきまちテラス長浜広場にて生物同定している様子



図 1：米川フォーラムチラシ



写真 2：長浜市内保育園児が遠足で水槽を見ている様子

プロジェクト名（活動テーマ）：	
AR コンテンツを用いた草津の魅力発信	
SDGs 目標	 
提案者	： 龍谷大学理工学部 高島 祐輔
自治体担当者	： 草津市 商工観光労政課 重政 宇政
連携大学担当者	： 龍谷大学REC 津秋 博之
発表者	： 龍谷大学理工学部 高島 祐輔

1. 取組体制

・龍谷大学

ハード・ソフトウェアを用いたコンテンツ作成

・草津市役所

参考資料の提供、撮影場所の許可申請、市役所のホームページへの情報を掲載、その他の関連機関や企業への掲載依頼や紙媒体設置依頼

2. 背景・目的

近年、草津市の人口は増加傾向にあり、新しく草津市に来た人や草津市を知らない人に、草津市の魅力を伝えたいと考えた。そこで、草津市の魅力を大人でも子供でも楽しみながら知って貰えるようなコンテンツの作成を目指し、シビック・プライド(ふるさと草津の心)の醸成を目的とする。

3. 活動内容

草津市の魅力を伝える手法を検討し、AR とホームページを用いたコンテンツ作成を行った。

AR については、AR を使用したゲームアプリが流行していることから、小さい子供から親しみやすいのではないかと考え取り入れた。今回の我々はスマートフォンを使用し AR マーカーにカメラをかざすことで、デバイス上でスタンプラリーを行うことが出来る様に進めた。

次に、ホームページでは自宅からでも草津市を少しずつ知って好きになって貰える様に検討し、作成を行った。

その他コンテンツとしては草津市の魅力を紹介する「草津魅力マップ」の作成と 360 度カメラで撮影した映像の掲載を行った。

<活動スケジュール>

2 月～3 月：動画撮影の準備・練習、AR 作成の準備

4 月～5 月：現地撮影

6 月～10 月：撮影した素材の編集(写真、360 度動画)、AR 作成、ホームページ作成、魅力マップ作成




11 月：発表としてまとめる

4. 成果と課題、今後の取組

マーカにスマートフォンのカメラをかざすと画面にオブジェクトを表示するARを作成したが、現時点ではARで単純なオブジェクトの表示を行うだけであるので、次年度はタップによってオブジェクトが動くなどの遊び心のある操作を取り入れる。

また、ホームページの大まかな設計をし、掲載するコンテンツとして360度カメラで撮影した映像と、草津市の魅力を伝える魅力マップの簡易版を作成したが、ホームページのコンテンツが少ないため、次年度は実際に草津市で行われるイベントなどに訪れることでコンテンツを増やし、魅力マップは内容が充実したものを再度作成する。

これらに加え、今年度は出来なかった幅広い年齢層の人に実際にARを体験してもらう機会をつくり、意見をもらうことによって、子供から大人までみんなが楽しめるようなコンテンツ作りを進めたいと考えている。

プロジェクト名（活動テーマ）：	
琵琶湖よ、自然に還れ “未来への遺産”	
SDGs 目標	  
提案者	： 渡辺太陽 滋賀大学ボランティア系サークル “マスターネイチャー” 代表
自治体担当者	： 坂東利弥 彦根市生活環境課環境保全係
連携大学担当者	： 鈴木康夫 滋賀大学経済学部
発表者	： 渡辺太陽 滋賀大学ボランティア系サークル “マスターネイチャー” 代表

1. 取組体制

■ 滋賀大学ボランティア系サークル “マスターネイチャー”

琵琶湖の環境問題をテーマにした完全オリジナル紙芝居「カップのニラミ」を製作。子供達への読み聞かせ活動。琵琶湖湖岸沿いで、ゴミ拾いの企画と運営。

■ 彦根市・・・ゴミ拾い活動の際のゴミ処理や広報の協力。地域との調整等。

■ 滋賀大学・・・ゴミ拾い活動の協力。

■ 地域の方々・・・「カップのニラミ」紙芝居の読み聞かせやゴミ拾い活動への参加。

2. 背景・目的

近畿圏に住む人々の生活と産業を支える琵琶湖の湖岸部にペットボトルや袋などのゴミが多数散在している。これらのゴミの多くは、ポイ捨てや不法投棄が原因だと考えられる。ゴミにより琵琶湖が汚れ、美化や衛生の観点から環境に重大な影響を及ぼしている。

琵琶湖の環境問題をテーマにした紙芝居の読み聞かせを通して、琵琶湖の生き物やゴミ問題に興味を持ち、自分達にできる事を考えるきっかけ作りの場とすることを目的とする。大人になっても環境に気配りができるように、将来を担う子供達を対象とする。

3. 活動内容

環境問題って小難しいけど、紙芝居なら楽しく学んでもらえるのではないかと思い、紙芝居の製作を決意しました。琵琶湖の環境問題をテーマに紙芝居「カップのニラミ」を独自製作。琵琶湖の美しさ保護や子供たちへの伝承を目標に、幼稚園や小学校、地域の集まりなどで読み聞かせ活動をしています。

■ 「カップのニラミ」

○ 登場人物

・ 主人公・・・彦根市芹川に昔から住み着いていると噂のカップ。

・ 友達・・・小鮎さん、石亀さん、かいつぶりさん

○ ストーリー

友達の生き物達がびわ湖の環境問題に苦しむ様子にカップのニラミが心を痛め、仲間を助けるためびわ湖をきれいにしようと立ち上がるストーリーです。

■環境啓発活動

○第一回「カッパのニラミ」公演会

彦根おやこ劇場で、0歳から小学二年生まで23人と保護者15人の前で11月24日水曜日に初めて披露しました！子供達のびわ湖を守る気持ちにどう響いたのか！？



○ゴミ拾い活動「びわ湖をきれいにしよう！」

11月23日火曜日に、滋賀大学の学生と共に湖岸清掃活動。参加者計7名燃えるゴミ2袋、不燃ごみ1袋分のゴミを集める。



本サークルでは、ゴミ拾い活動や環境保全団体に話を聞く事で、環境問題への知見を深め、環境教育の更なる質向上を実現する。

4. 成果と課題、今後の取組

■「カッパのニラミ」公演会の反応（成果）

読み聞かせの後、保護者12名にアンケート調査を行った。質問は3項目で、5段階で評価してもらった。それぞれ評価5が9人、評価4が3人ずつという結果になった。

- ① カッパのニラミは面白かったですか？
- ② カッパのニラミによって子供の環境意識が高まると思えますか？
- ③ カッパのニラミを通して、子供と環境について考えるきっかけになりましたか？

感想では、「登場人物も場所も身近なびわ湖のお話で、環境問題はそう遠い話ではないと思いました。」や「学びと楽しさをありがとうございました。」とあり、自分達が伝えたかったことが伝わっている事がわかった。子供達は絵を書いてくれ、カッパさんがゴミ拾いしていたり、トングが描かれていたり…

「カッパのニラミ」を通して、びわ湖の環境やゴミ問題を身近に感じてもらえたようだ。

■今後の取り組み

今後も紙芝居を通して、子供達にびわ湖の環境問題について楽しく学んでもらいたい。地域の餅つき大会や小学校の「朝読書」の時間での読み聞かせを予定中。また、中国語と英語訳も制作し、国籍問わず親んでもらえるような作品にしていきたい。

大学生が提案する びわ湖とツーリズム

大学や学部・学年の異なる学生がチームを構成し、滋賀県を中心に様々な活動に
取り組む企業やNPOの方にインタビュー。SDGsの観点からツアープランと記事を執筆しました。

大津市	Group1	TOURISM	母なる湖が見つめる私たちの暮らし 雄琴エリア	11
		INTERVIEW	地域と観光が未来の滋賀をつくる おごと温泉観光協会	
	Group2	TOURISM	過去から学ぶ大津という街 御陵エリア	11
		INTERVIEW	華やかな街、大津 大本山 圓満院	
甲賀市	Group3	TOURISM	人よし、自然よし、伝統よし 信楽エリア	11
		INTERVIEW	信楽のためにできることを探して 古着屋siveL	
	Group4	TOURISM	豊かな自然と歴史が支える人とくらし 信楽エリア	12
		INTERVIEW	レジデンスで信楽をSHIGARAKIへ 滋賀県立陶芸の森	
長浜市	Group5	TOURISM	長浜にしかない出会いを 長浜エリア	15
		INTERVIEW	つくる、楽しむ、サステナブル ムーンフードジャパン	
	Group6	TOURISM	歴史・文化・自然を味わう長浜 長浜エリア	11
		INTERVIEW	「人に入ってもらうことが使命」 賤ヶ岳リフト	
	Group7	TOURISM	湖北・長浜を旅して考える 長浜エリア	7
		INTERVIEW	大切なのは、人とつながること キテハ食堂	
東近江市	Group8	TOURISM	豊かな自然と共存するまちを感じる 愛東エリア	11
		INTERVIEW	「夢をカタチに、安心をカタチに」を胸に ファームキッチン野菜花	
彦根市	Group9	TOURISM	ツーリズムで感じる彦根の魅力 彦根エリア	4
		INTERVIEW	彦根の魅力を地元へそして全国へ 彦根キャッスル リゾート&スパ	
	Group10	TOURISM	生き生きとした活気のあるまちづくりを 彦根エリア	11
		INTERVIEW	「ハレ」にも「ケ」にもそっと寄り添う Hareto-Keto	

SHIGA SDGs Studios PLUS

「SHIGA SDGs Studios +(PLUS)」では、環びわ湖大学・地域コンソーシアムに加盟する自治体を中心とした実践者、滋賀県を中心に様々な活動に取り組む企業やNPOの方に参加学生がインタビューを行い、SDGsの観点から記事を執筆。最終成果を冊子やメディア、Web、動画で発信します。大学や学部・学年の異なるチームメンバーとともに社会課題を知ることや取り組みを発信する楽しさを体験できるプログラムです。今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、全プログラムをオンラインで行いました。

社会課題を知って、取り組みを発信！

SDGs レクチャー・交流会

参加学生同士で自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行った後、一般社団法人インパクトラボ・代表理事の上田氏によるSDGsのレクチャーを実施しました。「学んだことを次の世代（中高生）や地域の方に発信できるようになる」という、プログラム全体の目標を共有しました。

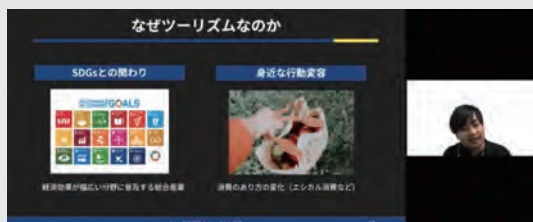
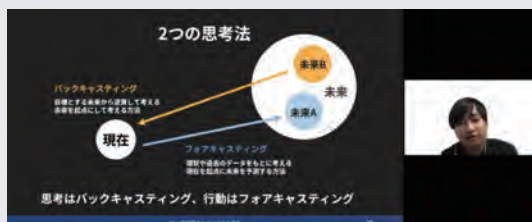


SDGsレクチャー
講師

一般社団法人
インパクトラボ
代表理事

上田 隼也 氏

立命館大学卒。立命館SDGs推進本部 イノベーション・オーガナイザー。学生時代からSDGsに実践的に取り組み、立命館大学で日本初の学生主体のSDGsイベント・Sustainable Weekを立ち上げる。現在は立命館SDGs推進本部でイノベーション・オーガナイザーを務めながら、教育現場でも実践に取り組む。



SDGsレクチャーの様子。レクチャーはすべてオンラインで行いました。